

【論文】

上田保の「日本キリシタン文化センター」構想に関する調査研究 その1

A Study on the conception of Catholicism museum in Oita Japan by UEDA Tamotsu

日高 圭一郎*¹
Keiichiro HITAKA

Abstract : This paper has mentioned about the conception of Catholicism museum in Oita Japan by UEDA Tamotsu. The museum was unbuild although this conception was proposed as a new project to promote Oita city.

Keywords : *Oita city, UEDA Tamotsu, Catholicism museum, Post-war Reconstruction period*
大分市, 上田保, キリシタン文化センター, 戦災復興期

1. はじめに

筆者は、これまで大分市の戦災復興期のまちづくりの全体像や、その評価等について述べてきた^{1)~9)}。

本稿では、大分市の戦災復興期のまちづくりを主導した上田保元大分市長（以下、上田という。）の「日本キリシタン文化センター」構想に焦点を当て、その内容が公に提示された過程について述べる。

(1) 「日本キリシタン文化センター」構想について^{10)~13)}

本構想は、大分市の戦災復興事業が終わりに近づき、次のまちづくりの取り組みが求められた時期に、上田が立案したとされる。

大分市は大友宗麟が統治していた中世期において、キリスト教布教の中心地となった歴史を持ち、そこに上田が着眼し、高崎山自然動物公園に続く、新たなまちづくりの仕掛けとして、本構想は立案されている。

本構想は、大分市内の「デウス堂」跡^{註1)}を対象敷地とし、立案された当初は「デウス堂跡記念公園」との施設名称であった。構想の進展に伴い、「日本キリシタン博物館」、「日本キリシタン文化センター」と名称が変更されている。

上田は、この「日本キリシタン文化センター」構想実現のために、様々な財源確保の取り組みを行ったが、結果として構想実現には至らなかった。

(2) 調査研究の方法と既往の関連研究

本調査研究は、「日本キリシタン文化センター」構想について記述されている郷土史料^{10)~13)}と、往時の大分合同新聞^{19)~20)}、大分市報^{21)~22)}を対象とした文献調査による。

*1 建築都市工学部建築学科

また、本構想のように、立案されたものの実現されることのなかった建築や都市に関する研究書は多く存在している^{14)~18)}。本稿執筆は、これらの研究書についても参考に進めた。

2. 「日本キリシタン文化センター」構想の端緒

「日本キリシタン文化センター」構想の端緒となったのは、フランシスコ・ザベリ（フランシスコ・ザベリオ）来邦四百年記念事業である。以下に、このことを報道した大分合同新聞（1949年1月19日、朝刊、2頁）の記事を示す。

「日本キリシタン文化センター」構想を理解する上で重要と考えられる部分には、下線を引いている。

<大分合同新聞 1949年1月19日（朝刊）2頁>¹⁹⁾

ザベリオ師とゆかりの大分 デウス堂を再現 来邦四百年をしのぶ記念行事

フランシス・ザベリオ師来邦四百年記念に同師ゆかりの地大分市ではその遺跡であるデウス堂跡を聖地として復活するとともに各種の記念行事を催すべく大分カトリック教会と市が中心となって遺跡顕彰の企てをすすめている

一五四九年日本にキリスト教布教の第一歩を印したフランシス・ザベリオ師が来邦してことしが四百年に当たり、キリシタンゆかりの長崎、鹿児島その他各地で四百年記念祭が盛大に催されまた外国からも巡礼船が訪れると伝えられているが、ザベリオ師

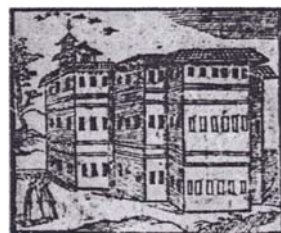
に最も因縁の深い大分市では研究や巡礼の外人が来分すると予想される六月ごろに展覧会、講演会そのほか各種の意義深い催しをカトリック教会、大分市を中心に民間団体も参加して盛大に举行しようと関係者の間に準備が進められているが十八日午前十時大分カトリック教会神父マリオ・マレガ師は上田大分市長を訪れて打合せた結果、まず四百年記念事業にザベリオ師の聖地市内東新町のデウス堂遺跡を復活してむかしのデウス堂そのままの建物を鉄筋コンクリートで築造し豊後キリシタン史料の博物館

とし周囲約一万坪（完成後）の公園地帯とする、直入郡竹田町中川神社にあるキリシタンの鐘が長崎市から運ばれたものといわれているが、これは臼杵町にあつたものと推認されたからこの機会に大分市に持ち帰りデウス堂に納め朝夕美しい音色を響かせることなどをきめ同日午後両氏はデウス堂遺跡を視察し美しい「日本の聖地」の構想を描いた竹田のベルを大分へ

【マレガ師の話】デウス堂（記念碑にダイウス堂とあるは間違い）には四百年前に壮麗なコレジオ（大学校）があり日本人と外人が半分ずつ入学し天文、数学、医学を学んでいた、上田市長さんも大賛成で復活に全面的に協力するといわれるから四百年記念事業として着手し、世界の人人に「まず大分市の聖地を」といわれる名所としたい、竹田町の中川神社のベルは長崎のものといわれていたが、ベルに刻まれている 1612 年サンチャゴ・ホスピタルという文字はスペイン語でホスピタル（病院）は臼杵にあつた、長崎のはミゼリコロジアといいポルトガル人が建てたものでホスピタルではない、上田市長さんが早速竹田の町長さんに電話をかけ大分市にもらうように話されたので近く受取りにいくつもりです

民間の協力要望

【上田大分市長の話】最初から大きなものの建設は



写真【上】デウス堂をおとずれたマレガ師と上田市長
写真【下】四百年の昔のデウス堂とならんであつた大学の写生図

土地そのほかの関係でむずかしいのでまず千坪くらいの敷地からはじめデウス堂の復活、記念の塔、そしてこれを取りまく美しい遊歩道をつくり日本のエルサレムとして信者の世界聖地巡礼のプログラムに加えてもらうのだ、そのほか記念行事は民間の人人の協力をえて盛大にやりたい

全懸民参加せよ

【大分史談会高山虔三氏の話】ザベリオによつて日本の社会文化教育、経済の発祥地でありザベリオの列聖運動の皮切りをしたのは大友宗麟であつた、大分市の四百年記念行事はザベリオが府内（大分）を訪れた一五六一年からかぜえて明後年にするのが妥当だという人もあるが、ザベリオが日本にきたのは一五四九年でこの年を「日本来訪記念」として大分市も行うのが正しい、これは大分市民はもちろん懸民全体で参加して記念事業や催しをすべきだと思う。

以上の報道記事からは、フランシスコ・ザビエル来邦四百年記念事業に際してのカトリック教会マリオ・マレガ師^{注2)}と上田の会談においてのマリオ・マレガ師からの「デウス堂」復活についての提案が、「日本キリシタン文化センター」構想の端緒であつたことがわかる。

この段階で、マリオ・マレガ師から提案された内容は、「デウス堂」を復元し、併せて豊後キリシタンに関する博物館を建設、さらに、一帯を公園として整備しようとするものであつた。

この報道の後、1949 年 6 月には、フランシスコ・ザビエル来邦四百年を記念して、ローマ法王庁代表ら国際巡礼団が大分市を訪れている。その際、上田は巡礼団を「デウス堂」跡等に案内している。

このことについては、中川は、「この時期においては、上田は「デウス堂」の存在を知っていただけで、府内が西洋音楽や育児院、西洋式病院の発祥地だとは知らなかったと上田が晩年語っていた」と述べている¹²⁾。つまり、1949 年の時点では、上田は中世期における豊後府内でのキリシタン文化の隆盛についての知識が乏しかったようである。

3. 「日本キリシタン文化センター」構想の具体化

1949 年の報道から約 3 年後、財源の確保を含め、具体化された構想の内容が大分合同新聞で報道されている。以下に、その大分合同新聞（1952 年 4 月 11 日、夕刊、2 頁）の記事を示す。

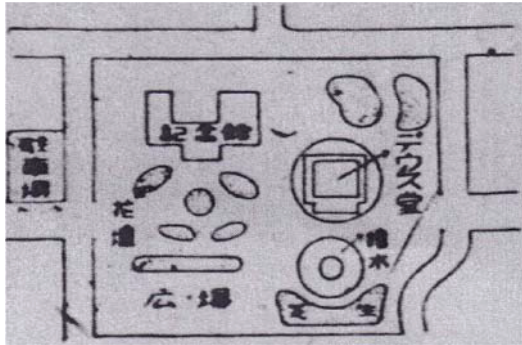
「日本キリシタン文化センター」構想を理解する上で重要と考えられる部分には、下線を引いている。

＜大分合同新聞 1952 年 4 月 11 日 夕刊 2 頁＞²⁰⁾

大分にデウス堂跡記念公園 ローマ法王廳も協力

建設計画実現の見込み

約四百年前、大友宗麟時代にキリシタン布教の中心として大分市顕徳寺町に建設したと伝えられるデウス堂（天主堂）跡を中心にした一帯約七千坪に大分市とローマ法王庁の協力でデウス堂記念公園建設の計画が進められており、財源にはローマ法王庁の協力でキリシタン・ペンシル（仮称）を世界中のキリスト教信者に売りその利益金を充てるという構想がねられている



上田市長の計画によれば市内顕徳寺町のデウス堂跡一帯を市で買い上げ、その中心に往年のデウス堂の姿をそのままに復興し、その横にキリシタン関係古文書、踏絵、手洗鉢、墓石などキリシタン文化を物語る品物を収めるキリシタン文化博物館を約六千万円で建設するほか芝生、噴水、広場を設けて近代的公園とし遊歩公園につなぐもので総予算は一億四千万円となっており、その財源としては滝廉太郎像の建設にあたって大分市が行った「滝エンピツ」と同じ方法で豪華なキリシタン・ペンシルを作りこれをローマ法王庁の協力で全世界のキリシタン信者に売る計画である

この計画は最初上田市長のもとで練られ元大分市在住のマリオ・マレガ師に打ちあけたところ同師も賛同、たまたま市長が仕事上で知り合いになった建設省技官石原耕作氏の紹介で同氏の一高時代の友人金山政英氏（ローマ市バチカン市国在住）に上田市長からさる三月七日事情を訴えて「ローマ法王庁がこの計画を理解し三千万円程度の下賜を願いたい、法王から財源にあてるキリシタン・ペンシルの買い取り方を全世界の信者たちに教示していただきたい」むねの依頼状を送ったところ八日金山氏から「尽力する」むねの返答があり、ようやく具体化する見込みが強くなった。

上田市長は九日、さらにキリスト教の九州地区責任者である福岡市在住の深堀仙右衛門司教に対しても詳細な事情を書き送って協力を求めた、なおこの計画がさらに具体化すれば市では県下の郷土史家、

文化関係者で期成同盟会を結成、強力に推進し東洋におけるキリスト教の聖地として大分的に宣伝に乗り出すことになっている

以上の報道記事から、上田は構想実現のための財源は、滝エンピツ^{注3)}のようにキリシタン・ペンシル（仮称）を製造し、世界中のキリシタン教信者にローマ法王庁の協力で販売をし、その利益金を充てるとしている。さらに、「デウス堂」跡地一帯を大分市が買い上げる考えもあったことがわかる。また、建設する施設としては、「デウス堂」の復元にくわえて、「キリシタン文化博物館」と、既設の「遊歩公園」と接続した公園を構想している。

4.「日本キリシタン文化センター」構想についての地元有識者の反応

具体化された構想の内容が大分合同新聞で報道された約2か月後、大分市報に「日本キリシタン文化センター」構想に関する地元有識者の見解が含まれた記事が掲載されている。以下に、その大分市報（第138号、1952年6月1日、二面・三面）の記事を示す。

「日本キリシタン文化センター」構想を理解する上で重要と考えられる部分には、下線を引いている。

<大分市報第138号 1952年6月1日 二面・三面>²⁾

大分市報発行三周年 大分市の夢 記念座談会
大分川から東に大工業地帯

出席者（順序不同）

大分市長 上田保

大分合同新聞社夕刊編集部長 山本益樹

大分放送局放送課長 太田三郎

岩田高等学校校長 岩田正

大分市議会議長 後藤正直

別府女子大学学長 佐藤義詮

高山活版専務 高山虔三

大分商工会議所副会頭 桑原専一

大分市役所市長室長 内田達夫

大分市報発行三周年を記念し五月二十四日午後一時市役所来賓室に於て後藤市議長の司会で「大分市の夢」と題する座談会を開催致しました。茲にその要旨を紙上に掲載することに致しました。

【内田室長】大分市報は本年の四月からこれまでの回覧を止め全世帯に無料配布することになり、その間その内容の充実を計つてまいりました。

本日は市報発刊三周年を記念して「大分市の夢」と題する座談会を開催することになりましたが今日のお話は夢ですから或いは実現できないもの

もあるかと思いますが、然し今後の大分市政の参考になり又方向づけるものであれば非常に結構だと思います

【上田市長】山に入つて山を見ずと云う諺があるが、久しく其の地位にいと段々なれて来て新しい考えが出なくなるものです。今日は皆さん方が大分市長になつた気持でお話して戴きたい

【山本益樹氏】大分の街の復興振りは訪れる人々を驚かす程立派である。然し私の夢は大分市の生産方面にもつと新しい施設ができて大工場が建ち並び完備したふ頭には何万トンという貨物船や客船が横づけになることで、そのために現在の津留の飛行場跡を工場誘致の候補地として工場の誘致を計画してもらいたい、勿論大分県に空港はあるに越したことはないがそれには鶴崎の先の大在か坂の市に作つたらよいと思う

【桑原専一氏】大分市発展は東に延びることで大分川の両岸地帯が大分市の中心とならねばならない、そのためには商店街は東に延びて工業地帯は大野川両域にすべきであると思う、又大分と別府を結ぶ道路が現在の一本では困るので山の方にもう一本通し、高崎山を観光的に設備したらよいと思う、それから新川の辺りにも一本大きな道路を通すこともよいと思う

【岩田正氏】将来の大分市は鶴崎を含めて考えてみてもよいのではないか、工業地帯は、都市の端がよいので、鶴崎辺に持つて行くことがよいと思う、又別府の観光客を大分にも来るようにする必要がある、そのためには高崎山の利用を考えドライブウェイや登山道をつけるとかして別府湾を一望の下にながめられるようにしたらよいのではないかと思います、大分は昔キリスト教の盛んな地であつたので、これを国際的に考えて日本におけるキリスト教の入つて来た窓としてキリスト教の公園を作りたい、又竹田などの立派な文化材や、県出身一流大家の作品を集め大分市に来れば一応すべてを見ることが出来るようにしたい

【高山虔三氏】大友時代の大分は大分川を中心にして発達していたようだ、最近新聞に飛行場誘致の反対が載っていたが私も誘致には反対だ、大分市の発展は東に延びることだと思う、又電車も坂の市まで延ばすこともよいのではないかと、先程の話ですが市長さん提案のデウス堂跡を復興したい又美術館を作り竹田などを展覧できるようにしたいものだ

【太田三郎氏】大分市にきて丁度三年になりますが私が東京を発つ時は大分がモデル都市だということだけを伺つて来たのですが来た当時と現在では見違える程立派になりました、しかし仕事の関係で

放送局が何か催し物をやりたいとすると会場の点でどうしたらよいかと何時も悩まされるので公民館と申しますか公会堂といふますか早やく作つてもらいたい、又近代的設備を持つ図書館もほしい

私達の所によく外人が訪ねてくるのですが、大分市の何処を案内してよいのか困るので史跡等も知らせてもらいたい

人工で瓜生島を再現

【山本益樹氏】私は別府湾に昔あつたと云われる瓜生島を人工で再現させて高崎山から大分、別府、瓜生島に空中ケーブルをかけたい、そして高崎山の猿を自然のまゝにならしセンベイやまんじゅうをやればよつて来るようにし訪れる人々を楽しませたい、又大分と別府から瓜生島に橋をかけて船の出入する時は都合のよいようにして海を楽しみたい

【後藤正直氏】高崎山の話が出ましたが私も大変よいことだと思つています、私は高崎山の頂上にホテルを作り別府の楽天地と高崎山に空中ケーブルを通すとよいと思います

【桑原専一氏】私は別府湾の海上を滑走して別府や国東等に短距離で行けるようにしたいものだ

【上田市長】高崎山の問題ですが何にか人をひきつけるものがなければ駄目だ、そこで高崎山の猿を如何にしてならすかという事であるが私はこう考えている

猿の好きなリンゴを毎日一定の場所できまつた時間に太鼓等をトントンと鳴らして与え、これを何年も繰返すならば猿もなれて来るのではないかと、それには万寿寺の別院の方をお願いするのが一番良い、なんでも高崎山には一八六匹猿が居るそうで、これは京都大学で研究しているのでわかつたのだが・・・、この猿をよくならしその生態を見ることが出来るようになるのはそんなに困難なことではないのではないかと、然し心ない者が石を投げたりすれば一年の苦心も一日にして駄目になってしまう

【山本益樹氏】外人も高崎山の猿に興味を持っていますね

【高山虔三氏】昔高崎山には真赤な桜草があつた、頂上には木は無く大変見はらしの好い所だつたが今では三十年ぐらいの松が繁り大分市の方は見えない、これはなんとかしたいものだ

【上田市長】頂上の木は失業救済で切つて兎に角見はらしの良ようにしたい

【桑原専一氏】高崎山に大友宗麟の銅像を作り、又大きな電氣をつけたらよいと思う

【佐藤義詮氏】高崎山に道路を作つたらよいでしょう、最近大分は久留米より良くなつたといわれてい

ますね

【後藤正直氏】大分市の史跡として元町の石佛も今後大いに生かしデウス堂跡の復興も是非実現したい、先程大分の飛行場跡の問題が出ましたが市長さんから話を！

空港より工場

【上田市長】津留の飛行場跡は四〇万坪あります、その内で現在使っているのは八万坪で残りの三十二万坪は使用されていないのです、然しこの八万坪がT字形になっている関係で残りの三十二万坪が全部使用できない事になるのです、又飛行場の附近には工場を作ることが出来ないのです、そのわけは高い煙突が作れないからです飛行場として使用される八万坪のために四十万坪を犠牲にするか、これを犠牲にしてまで空港がほしいかどうかを考えて見る必要があると思う、然も現在使用できる滑走路は一キロしかないのです二十五人乗の飛行機がやつと着陸できる程度です、これが三十人乗、三十五人乗の飛行機になれば、もう滑走路は使用できないのです、御承知の通り津留の飛行場は大分川と東の裏川に挟まれている関係でもうこれ以上滑走路を延ばそうにも延ばしようがなく将来性がまったくないので

そこで大分県がもし今後計画的な大工場地帯を作るならば大分川から大野川にわたる海岸地帯をサンドポンプで埋立をする以外にはないと私は信じます、私にいわせるならば私の夢は鶴崎と合併したいと思つています、又大分川から東には小さな川が沢山あり自然の運河になっているのでこの地帯を工業地帯にするならば四〇〇万坪にもなるのです

大分市には富士紡の工場がありますがその敷地はわづか四万坪です、その富士紡が大分市の税金の四分の一をまかなつています

近い将来鶴崎は大分市に合併されるべきではないかと思つていますが先ず東大分の飛行場跡が工場地帯になれば将来の発展はないのでその意味から東大分は工場地帯を作る第一歩であると思つて、現在の富士紡には一、五〇〇人いますが東大分が工業地帯になれば十五万人増すことになり理想的な都市の人口となるわけで、そうなればよい映画など真先に大分市で封切されるようになりますよ

【岩田正氏】大分市の性格を先ずきめることが大切だと思う

【山本益樹氏】大分市の丘陵地帯に園芸の大資本を投入して果物や野菜等を大量に作つたらよいと思う

【上田市長】志手椎迫方面には果樹公園という構想でやつているので今後は立派な果樹園となり正月になつても門松にする松も竹もないと云うぐらいにしたい、現在でも樹一本増す毎に二十円補助している

試験場も今造つているので品質の改良や新種の発見までやりたいと思つてい

先日後藤文夫氏が帰つて来られた時、蜜柑とビワの権威者を紹介して下さいようお願いしました、中島製粉機工場の所から山手に入る丸尾道路を作つたが之はトラックの通れる立派な道路で大変果樹を作つている人々に利益を与えています

【桑原専一氏】大分市の人口倍加運動をやるんだネ

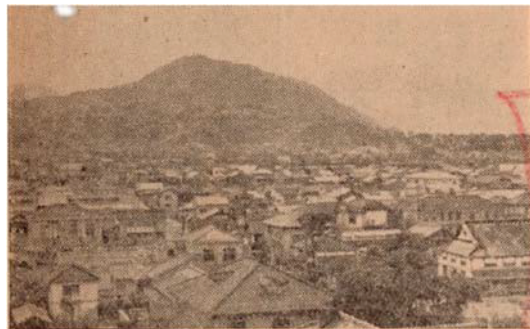
【上田市長】家を作れば人口は増すが然し住む人に職を与えなければ意味がない

【岩田正氏】大分市は今後工場都市になるのだから松原はいりません

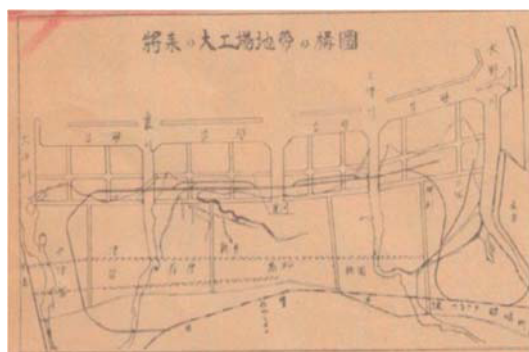
【上田市長】港のそばに松原があつたり県営グラウンドがあつたのでは意味はないですよ、港には倉庫が並び問屋がなければ立派な港じゃない

【岩田正氏】大分市の下水の点ですが、これには相当な金がかかるでしょう

【上田市長】下水の完備しているのは岐阜と豊橋なんです、岐阜などは全部水洗便所です。それには六千坪の浄化装置がいり五億円かゝります、大分市は勾配がなく僅かに三米しか海面より高く



【写真】大分市役所屋上から高崎山を望む



ないので浄化装置を作るとすると海岸地帯になるが海岸にはそんな土地はなく今作るとすると十億円かかる、そこで大分市では予算五〇万円で権威者によつて近日調査するようにしている

【後藤正直氏】大変有意義な会であつたことを感謝致します、この辺で今日の会を閉じたいと思います（終）

以上の大分市報に掲載された『「大分市の夢」に関する座談会』では、大分市の工業化や観光による地域振興が座談の軸となっている。

その中では、大分市議会議長の後藤正直、当時の大分市を代表する文化人であった岩田正と高山虔三の3人が「日本キリシタン文化センター」についても発言しており、3人とも本構想に賛同する意見を述べている。

このことから、当時、本構想に賛同する雰囲気が地域的に醸成されていたことが推測される。

5. 「日本キリシタン文化センター」構想に関する上田保の公式表明

具体化された構想の内容が報道されてから約1年半後、上田は大分市報により「日本キリシタン文化センター」構想を市民に向けて公式に表明している。この時点では、施設名称を「日本キリシタン博物館」としている。以下に、このことを伝えた大分市報（第173号、1953年10月1日、一面）の記事を示す。

「日本キリシタン文化センター」構想を理解する上で重要と考えられる部分には、下線を引いている。

＜大分市報第173号 1953年10月1日 一面＞²²⁾

日本キリシタン博物館の建設について

日本キリシタン博物館建設委員会 委員長 上田保

今般日本キリシタン博物館建設委員会では、キリシタンにゆかりのある大分市の旧デウス堂跡を中心として約七千坪の地に「日本キリシタン博物館」を建設して、我が国に於けるキリシタン文化財を蒐集保存し、兼ねてキリシタン文化研究の道場たらしめたいとの大計画を発願いたしました。

この博物館建設には約三億円の巨費を要する見込みでありますが既にローマ法皇庁よりも本年二月その基金として米貨一千ドルの御寄贈をうけましたので、当委員会は愈々勇躍所願の必成を期している次第であります。

併し、この膨大なる金額は固より県市財政で負担すべきものではないので、その調達は広く全世界の文化人や信者に呼び掛け、市長考案の大分県特産の

竹材で製作した十字架を世界中に売り広め、その利潤を建設資金に充てることゝ致しました。

然し、その製作資金としても莫大な経費を要しますので、第一段として「記念鉛筆」を国内に売りさばき、その益金を以つてこの資金に充てる方法を探りました。

この大事業が実現しました暁には当大分市に文化の薫り高い国際的観光資源が生れ、一般観光客、文化人は勿論日本に來遊する欧米人も踵を接し、大分県にとつても日本にとつても素晴らしい施設となるであります。

しかし「ローマは一日にして成らず」地元の皆様の御理解にみちた不断の御協力なくしては到底この事業の実現は期し得られませんので、茲に皆様の御協力を切望する次第であります。

この企てに対して在京県人会の方々、わけでも一万田日銀総裁、後藤参議院議員、御手洗辰雄氏等は顧問として活躍して戴き、他の方々も非常な御盡力を賜っております。

また、一方カトリック信者としては、田中最高裁判所長官、元外務次官吉沢清次郎氏、日本文化放送協会常務理事利光洋一氏等を始めとして、夫れ夫れ真剣な活動をしておられます。そこで地元県民に対して先に「滝廉太郎鉛筆」で随分お世話になつてるので、重ねてのお願いで誠に迷惑なことゝ存じますが、何卒この事業が達成出来ますよう御援助、御協力をお願い申し上げます。

因に本事業のために左の方々が顧問となつて御協力下さっております。

東京司教 土井辰雄氏
福岡司教 深堀仙右エ門氏
日銀総裁 一万田尚登氏
最高裁長官 田中耕太郎氏
前上智大学総長 村上直次郎氏
外務省参事官 金山政英氏
大分県知事 細田徳寿氏
大分県議会議長 岩崎貢氏
大分県教育委員長 松本文雄氏
大分県教育長 飯出忠氏

以上の大分市報に掲載された記事から、1953年10月の時点で、期成同盟会として「日本キリシタン博物館建設委員会」が結成されていること、さらに、多くの著名人が後援者として参画していることがわかる。

くわえて、対象敷地が「デウス堂」跡地を中心とした約7,000坪の土地であり、建設費用として約3億円が見込まれていたことがわかる。

ただし、建設費用を県市財政で負担すべきでないとする

考えのもと、記念鉛筆販売に加えて、竹材で製作した十字架を、広く世界のキリスト教信者や文化人へ販売することにより、その調達を行うとしている。

また、1953年2月に、ローマ法皇庁より基金として\$1,000の寄附を受けていることが報告されている。

そして、構想している施設は「国際的観光資源」に成り得るとし、大分を含む地域社会に貢献するものと謳っている。

6. まとめ

本調査研究で得られた知見をまとめると、以下のとおりである。

(1)1949年1月の報道からは、フランシスコ・ザビエル来邦四百年記念事業についてのマリオ・マレガ師と上田の会談におけるマリオ・マレガ師からの「デウス堂」復活についての提案が、「日本キリシタン文化センター」構想の端緒であったことがわかった。

(2)1952年4月の報道からは、構想の内容は、「デウス堂」の復元と、キリシタン文化博物館、既設の「遊歩公園」と接続した公園の建設であり、敷地となる土地については、大分市が買い上げることが考えられていたことがわかった。

(3)1952年6月の大分市報からは、大分市議会議長の後藤正直、当時の大分市を代表する文化人であった岩田正と高山虔三の3人が本構想に賛同する意見を述べており、本構想に賛同する雰囲気が地域的に醸成されていたことがわかった。

(4)1953年10月の大分市報からは、以下のことがわかった。

①対象敷地を「デウス堂」跡地を中心とした約7,000坪の土地とし、建設費用として約3億円が見込まれていた。ただし、建設費用を県市財政で負担すべきでないとし、記念鉛筆の販売や、竹材で製作した十字架を、世界のキリスト教信者や文化人へ販売することにより資金調達を考えていた。

②さらに、期成同盟会として「日本キリシタン博物館建設委員会」が結成され、カトリック信者を含めた多くの著名人が後援者として参画していた。また、当時、ローマ法皇庁より寄附を受けていたこと等から、キリスト教信者からの支持も受けていた。

③上田は、構想した施設は「国際観光資源」になるとし、大分県を含めた地域社会に貢献するものと考えていた。

注釈

注1)「デウス堂」跡地²³⁾：1553年に豊後国府内に建築されたキリスト教教会の跡地である。現在の大分市顕徳町に位置する。デウス堂では毎日ミサが行われ、少年合唱団隊によりオルガンやビオラに合わせて聖歌が歌われ、宗教劇

が演じられたと宣教師の報告に記されている。往時の府内のキリスト教文化を象徴する場所であった。

注2)マリオ・マレガ(Mario Marega 1902.9.30－1978.1.30)²⁴⁾：1925年ローマ教皇庁立サレジオ大学神学部に入學、1927年司祭に叙階、1929年サレジオ大学神学部を卒業し、神学博士号を取得した。1929年10月ヴェネツィア港を出航、12月半ば、九州に到着し、神学校で教鞭をとる。1932年からは大分県大分教会や臼杵教会で司牧にあたり、『信仰の根本』『カトリックは答へる』などを日本語で出版する。1933年には大分市にカトリック海星幼稚園を設立、さらにキリシタンに関係する古文書を収集し、研究に従事し、キリシタン史跡の発見にも努めた。これらの成果は、地元紙やカトリック新聞に報じられ、1942年『豊後切支丹史料』を刊行するに至った。

注3)滝エンピツ(滝廉太郎鉛筆)¹²⁾：大分市内の滝廉太郎終焉の地に近接する遊歩公園に滝廉太郎の銅像の設置資金調達のために製造、販売された「滝廉太郎銅像建設記念鉛筆」のことをいう。製造原価3円のところを5円で販売し、その利潤を銅像設置の資金とした。この取り組みは上田の発案による。

参考文献

- 1)日高圭一郎. 上田保の都市政策に関する調査研究-戦災復興施策を中心として-.九州産業大学工学部研究報告. 第47号, 2011年3月, pp. 57-60
- 2)日高圭一郎. 上田保の都市政策に関する調査研究-戦災復興施策を中心として その2-.九州産業大学工学部研究報告. 第48号, 2012年3月, pp. 67-70
- 3)日高圭一郎. 上田保の都市政策に関する調査研究-戦災復興施策を中心として その3-.九州産業大学工学部研究報告. 第49号, 2013年3月, pp. 93-96
- 4)日高圭一郎. 大分市戦災復興計画の策定過程.九州産業大学工学部研究報告. 第53号, 2017年3月, pp. 69-76
- 5)日高圭一郎. 大分市の戦災復興に関する調査研究 その1.九州産業大学建築都市工学部研究報告. 第2号, 2020年3月, pp. 1-4
- 6)日高圭一郎. 大分市の戦災復興に関する調査研究 その2 -大分市の戦災復興の全体像について-.九州産業大学建築都市工学部研究報告. 第3号, 2021年3月, pp. 1-6
- 7)日高圭一郎. 大分市の戦災復興に関する調査研究 その3 -復興大分市と上田市長に対する評価について-.九州産業大学建築都市工学部研究報告. 第4号, 2022年3月, pp. 13-20
- 8)日高圭一郎. 大分市の戦災復興に関する調査研究 その4 -林房雄による復興大分市と上田保の評価について-.九州産業大学建築都市工学部研究報告. 第5号, 2023年3月, pp. 9-17
- 9)日高圭一郎. 大分市の戦災復興に関する調査研究 その

- 5 -石川栄耀による復興大分市と上田保の評価について-, 九州産業大学建築都市工学部研究報告. 第6号, 2024年3月, pp. 5-8
- 10)「上田保追悼録」刊行委員会. この人 上田保. 「上田保追悼録」刊行委員会, 1981年6月.
- 11)大分市史編さん委員会. 大分市史 下. 1988年3月.
- 12)中川郁二. ロマンを追って 元大分市長上田保物語. 大分合同新聞社, 2003年2月15日.
- 13)大分名誉市民、故上田保先生を偲んで. 1980年7月8日.
- 14)橋爪紳也. あったかもしれない日本 幻の都市建築史. 紀伊国屋書店, 2005年11月9日.
- 15)(社)日本都市計画学会中部支部編集. 幻の都市計画-残しておきたい構想案. 樹林舎, 2006年3月31日.
- 16)中川義英監修. まぼろしの都市計画. イカロス出版, 2017年7月30日.
- 17)Alison Sky, Michelle Stone. UNBUILT AMERICA Forgotten Architecture in the United States from Thomas Jefferson to the Space Age. McGraw-Hill Book Company, 1976.
- 18)クリストファー・ビーンランド. アンビルド 実現しなかった建築プロジェクト. 株式会社グラフィック社, 2022年8月25日.
- 19)大分合同新聞. 1949年1月19日, 朝刊, 2頁
- 20)大分合同新聞. 1952年4月11日, 夕刊, 2頁
- 21)大分市報. 第138号, 1952年6月1日, 二面・三面
- 22)大分市報. 第173号, 1953年10月1日, 一面
- 23)大分市. デウス堂跡(推定地). おおいた生涯学習情報まなびのガイド. 2025-02-14
<https://www.manabi-oita.jp/materials/detail/3206>
(参照 2025-02-14)
- 24)大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館. マリオ・マレガ神父. AI 人文学. 2025-02-14.
<https://www.nijl.ac.jp/projects/marega/intro/>
(参照 2025-02-14)